

しもの。【釋摩河衍論】に「已過五蘊聚落故」【秘藏寶鑰】に「藏海息七轉之波。蘊落斷六賊之害。」ウソリンキン 雲林院 【寺名】「ウソリンキン」を見よ。

え

【術語】マ 日 悉曇五十字門の一。十二韻の一。又、隨、講、曳、哩、に作る。【字記】に「短講字去聲。聲近「樓係反」。「大日經」に「髻」【金剛頂】に「隨」【涅槃經】に「哩」。【金剛頂經】に「隨」【一切法求。不可得故。】【文殊問經】に「稱隨字時。是起所求聲。【大莊嚴經】に「唱三騎字二時。出下所希求。諸過患事聲。【涅槃經】に「哩者即是諸佛法性涅槃」と法求不可得は【Brahmā】所求より釋したるなり。

【衣】 【衣服】梵語 Utrāsa 五條乃至二十五條の袈裟並に覆肩裙の類の總名。袈裟は其衣の色より付けし名なり。
【二衣】 【名數】一に制衣、五條七條九條の三衣は、佛制にして比丘をして必ず之を著しむるもの服せざれば罪を受く。二に聽衣、百一資具糞掃衣など土地の寒温人體の消長を計りて佛の開許せしもの、用ひざれども罪なし。【行事鈔下】に「衣總別編」
【三衣】 【名數】一に安陀會衣、Anatāpita 五條袈裟。二に鬱多羅僧衣、Uttarāsiṅgā 七條袈裟。三に僧伽梨衣、Saṅghaṭṭi 九條乃至二十五條袈裟。【行事鈔下】に「
【五衣】 【名數】四分律には三衣と僧伽支【初】

【三衣】と覆肩衣とを以て五衣とし、五分律には三衣と覆肩衣水浴衣を以て五衣とし、義淨の新律には三衣と僧脚崎と俱蘇洛迦とを以て五衣とす。【十八物圖】

い

【術語】梵語地地 Vajra の譯。疎所依のこと。親所依を所依といふに對す。即ち物の依止又は依憑となることを云ふ。
【驚】 【術語】愛語に作る。【南本涅槃經】に「驚」北本涅槃經に「野」【字記】に「長講字。近於界反」【大日經】に「滿」【金剛頂經】に「愛」【アイ】を見よ。
【イカ】 【詠歌】 【雜名】西國三十三所觀音の靈場を順禮者の唱ふる和讃。三十三所に各一首の和歌あり。花山院の御奉納なりと云ふ。
【イカ】 【永嘉】 【人名】温州永嘉の玄覺禪師。永嘉の人、姓は戴氏。出家して徧く三藏を採り、天台の止觀に精通す。後に曹溪の六祖に詣りて言下に契悟し、一宿して去る。時に一宿覺と稱す。翌日山を下りて温江に過る。學者輻輳し、眞覺大師と號す。唐の睿宗先天元年入寂、靈を無相大師と賜ふ。證道歌一首を著す。又、永嘉集あり、盛に世に行はる。【傳燈錄】五、佛祖統紀十

【永嘉集】 【書名】慶州の刺史魏緒、玄覺禪師の文を緝め、之を序して十篇となし、目して永嘉集と云【騰快四】(1585)
【イカイ】 【榮海】 【人名】眞言宗の僧。大舍人藤原俊業の子。醍醐山に入て聖陽僧正に就て密法を受け、貞和元年春正月東寺の長者に補せらる。【本朝高僧傳】十七
【イカウ】 【膚好】 【人名】天台宗の僧。叡山三昧和尚の門人。横川の藤行と共に肥前の肥御時に至て

觀音の來現を感ず。【本朝高僧傳】四十八
【イカクシヤラ】 【翳迦訖沙羅】 【雜語】 Haka-
【Ikaṅ】譯、一字。【一字頂輪王瑜伽經】
【イカサンニ】 【翳迦珊尼】 【雜語】 Hakaṅṅa
譯、坐食【四分律疏】宗記五本
【イカシヤタ】 【翳迦志吒】 【雜語】 Hakaṅṅa 翳迦は一、志吒は翳なり、一疊尊の姓名なり。【諸儀軌】
【映影】五
【イカビシカ】 【翳迦鼻指迦】 【術語】 Hakaṅṅa
翳迦鼻指迦舊譯、種子。新譯、問、聖者の位の名。「イチケン」を見よ。【安應音義】二十三に「翳迦此云一。鼻上迦此云問。言有二問在。不レ得被涅槃也。舊言二種子者。梵言鼻被迦。此云レ種。斯或譯者不レ善。梵言或華人レ不レ善。致致訛失也。【瑜伽論】六に「二問者。唯爲二生所問。不レ得涅槃。故名二問。問是際、舊名二生所問。謂不正也。」
【イクウ】 【觀空】 【人名】西大寺の觀空。字は圓道。慧海律師に從て具足戒を擧げ、徧く顯密の宗を探る。應永十四年、西大寺衆の請を受けて住持五歲、十九年三月、八十にて寂す。【本朝高僧傳】五十七
【イグ】 【影供】 【行事】 神佛又は人の影形をうつし造りたる木像又は繪像に供物を捧ぐることを。
【イグワ】 【榮華】 【雜語】 富み榮ゆること。【無量壽經】に「愛欲榮華。不可常保。」
【イケキ】 【翳迦四】 【雜語】 Akasṅṅa 譯、召請。【慧琳音義】三十五に「此句梵語也。唐名三召請句。來義也。」

【イサイ】 【榮西】 【人名】建仁寺の榮西、明庵と號す。又、葉上房。備中吉備津宮の人。叡山に登て台教及び密乘を擧ぐ。仁安三年、宋に入り、天台の章疏

【イセイシ】 【衛世師】 【流語】 「ショウロウシユウ」を見よ。
【イセン】 【瘞錢】 【雜名】 瘞處に瘞む錢を云。【釋門正統四】に「唐玉岐傳云。玄宗時。殿爲祖禁使。專以禪解中帝。意有所禪。大抵顯。顯。漢以來。非者皆有瘞錢。後世但俗。稍以紙爲錢。鬼事。至是岐乃用之。則是喪祭之禁。紙錢。起于漢世之瘞錢也。其禱神而用。漢錢。則自玉岐始耳。」案に日本の俗、板内に銅錢六箇を容れて六道錢と名く。即ち瘞錢の義なり。
【イセンジ】 【永宣旨】 【雜語】 或る官職に限りて、永久奏上を經ず補任するを得る宣旨を云ふ。永宣旨阿闍梨職の如きこれ也。
【イソセンミヤウ】 【永祚宣命】 【故事】 一條天皇永祚元年九月二十九日、餘慶座主職を襲ぐ。慶は智證の門徒なれば山徒之を拒む。勅使右大辨藤原在國、宣命を前唐院に讀む。常の例に異なり。之を永祚宣命と稱す。【天台史略上】
【インソン】 【歡尊】 【人名】 西大寺の歡尊。字は思圓。信慧阿闍梨に就て密宗の奥義を極む。後に東大寺に往て律學を研ぎ、覺盛等と共に自誓受戒を創す。西大寺に往して大に戒香を熏す。弘安四年蒙古入寇の時、後宇多帝の命を奉じて男山八幡宮に祈て神風を起す。正應三年九十にて寂す。正安二年、後伏見帝、興正菩薩と謚す。鑑眞の後、戒法の勃興、此時を盛なりとし、律宗の中興と稱す。【本朝高僧傳】五十九
【イソソ】 【榮尊】 【人名】 肥州萬壽寺の榮尊。神子と稱す。【本朝高僧傳】二十一
【イタイ】 【永代】 【術語】 永久の世代
【永代經】 【行事】 永代其人の忌日毎に經を讀む

を得て歸る。文治三年重て宋に入り、天童の虛庵に就て臨濟禪を傳へ、建久二年歸朝す。建保元年僧正に擢んでられ、同三年七十五にて寂す。榮西又、伯工者の天山に上て善好に就て密乘を傳へ、叡山に還て横川の顯意に依て密灌を受け、葉上流の一流を創せり。元亨釋書二、自在金剛集八。【理の號】

【イサン】 【瑩山】 【人名】 能州總持寺の開基、紹叡山九院。【地名】 比叡山の略稱。
【イザン】 【叡山】 【地名】 一に止觀院。二に定心院。三に總持院。四に四王院。五に戒壇院。六に八部院。七に山王院。八に西塔院。九に淨土院。

【叡山十六院】 【堂塔】 一に法華三昧院。二に一行三昧院。三に般若三昧院。四に覺意三昧院。五に東塔院。六に西塔院。七に寶塔院。八に菩薩戒壇院。九に護國院中堂。十に總持院。十一に根本法華院。十二に淨土院。十三に禪林院。十四に脫俗院。十五に興眞院。十六に一乘止觀院。【山門堂舍記】

【イシン】 【叡信】 【雜語】 皇室の御信心。○(盛衰記)山門の叡信淺からざれば。
【イシンヤク】 【翳身藥】 【雜名】 此藥を用れば、能く人のヤクを離して、他人の目に觸れざらしむるを得と云。印度の仙法にて、隱形藥と云。【龍樹菩薩傳】に「四人相親。莫逆於心。俱至三術家。求隱身法。至各與青藥一丸。告之曰。汝在靜處。以水摩之。用塗眼。汝形當隱。無人見者。龍樹樹此藥時。閉其氣。即皆識之。分數多少。銷滅無失。還告藥師。向所得藥。有七十種。分數多少。皆如其方。乃至四人得術。縱意自在。當入三王宮。宮中美人。皆被侵凌。」

【イサン】 【イサン】

【イサン】 【イサン】

成佛の記を授く。【海龍王經女寶錦受決品】
海龍王經 佛說海龍王經。四卷。西晋の竺法護譯。佛海龍王の爲に大乘の深義を説き、龍王龍女、阿修倫等に記別を興へしもの。【字軌六】(480)

海龍王寺 〔寺名〕南都法華寺の東北にあり。律宗。天平三年光明皇后の建立。【大和名所圖會二】
カイリキ 戒力 〔術語〕戒律の功力。戒を持ちし功力。五戒を持てば人間に生れ、十善を持てば天上に生るなど。

カイリツ 戒律 〔術語〕五戒十善戒乃至二百五十戒など、佛徒の邪非を防止する法律を云。梵語尸羅。Śīla 譯。戒防非止惡の義。梵語優婆塞義。Upāsaka 譯。律影。梵語毘尼 Vinaya 譯。律。南山律の義。【大乘義章一】に「言毘尼二者。名別有レ四。一曰毘尼。二曰木叉。三曰尸羅。四曰律。乃至尸羅者。此名清涼。亦名爲戒。三業交非。禁燒行人。事等如熱。戒能防息。故名清涼。清涼之名。正翻レ彼也。以能防禁。故名爲戒。戒乃所言律者。是外國名。優婆塞義。此翻爲律。解釋有レ二。一就教論。二就行辨。若當成就。教量名律。若當就修行調伏名律。四分戒疏一上」に或云尸羅。或云波羅提木叉。Tathakosa 或云毘尼。乃初云尸羅。此翻爲戒。戒有何義。義訓警也。由驚策三業。遠離緣非。正明其目。也。乃至云。毘尼。唐稱爲律。古譯。毘尼。皆稱爲戒。今以何義。翻之爲律。律者法也。從教爲名。斷割重輕開遮持犯。非法不定。故正翻之。持是れ初淨影は毘尼に四名ありとして、別に律の梵名を擧げ、後の南山は但三名として律の梵名を毘尼となす。【開宗記一本】に「言律藏者。梵云優婆塞羅儀。此譯爲律。

【普賢等海會聖衆】因總攝の名。海衆同く一穴に會する義。【僧寶傳】に「公道遺言。骸骨石於海會。示三生死。不與衆隔也。」
カイエ 界會 〔術語〕遍界悉く集會するを云。【九條錫杖文】に「恭敬供養三尊界會。」
カウ 香 〔雜語〕梵語。健達 Gandha 譯。香。【玄應音義三】に「健達此譯云香也。有情非情の氣分一切鼻に嗅ぐべきもの。大衆義章八末」に「芬散名香。此名不足。於中亦有二腥臊臭。不可備舉。且存香稱。【俱舍論一】に「香有レ四種。好香惡香。等不香。有二差別。故。」此中沈水等の薰物を以て六種供養の一とす。【大日經疏十一】に「隨取二華等。以信心加之。如下華即以華眞言。香以二香眞言。加之之。乃至如來加持力故。能成不思議業。」此香に塗香末香丸香等の別あり。

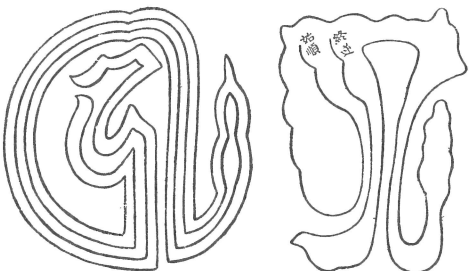
香爲佛使 〔雜語〕香は能く人の信心を佛に通ずる使なれば佛使と云。【行事鈔請講篇】に「增一云。有設供者。手執二香爐。而白三時至。佛言。香爲佛使。故須レ之也。【資持記下三之三】に「以能通信故云佛使。」
香爲信心之使 〔雜語〕【資持記下三之三】に「賢愚經六云。佛在二舍衛。鉢鉢國長者。有子名富寄那。後出家證阿羅漢。化二兄美那。造二海檀堂。請佛各持二香爐。共登二高樓。遙望二社祖。燒香歸命。會佛及聖僧。香烟乘レ空在二佛頂上。作二烟蓋。佛知即語神足比丘二同往。【僧史略中】に「經中長者請佛。宿夜登樓。手秉二香爐。以達信心。明日食時。佛即來至。故知香爲信心之使也。」
香如須彌 〔譬喻〕香を須彌山に譬ふ。【新撰仁王經上】に「無色界雨諸香花。香如二須彌。花如二

律。則法也。非法無以肅威儀也。【資持記上一之】に「律者梵云毘尼。華言律。乃不出三義。初言律者法也。從教爲教。斷割重輕開遮持犯。非法不定。第二言律者分也。謂須二商度。據量有在。若律呂分氣也。至三言律字安事。聿者筆也。必審。教驗。情在筆投斷。」
戒律藏 〔術語〕戒律を明かせる經典を云。彼れ戒律の文義を包含羅積すれば藏と名く。【大乘義章一】に「有苞含羅積名藏。三藏之一。」
カイリヤウニフツダウ 皆合入佛道 〔雜語〕【法華經方便品】に「如我昔所願。今者已滿足。化二切衆生。皆令入二佛道。釋尊の本願は一乘の法を説て其本願を滿足せしと云。是れ方便品に於て已に一乘の實を開顯し了りし後の述懐の偈なり。
カイリヤウフツダウ 皆合佛道 〔雜語〕皆令入佛道の略。【曲。高野物狂】皆合佛道緣覺の山を明す。
カイリヤウマンゾク 皆令滿足 〔雜語〕佛加被力によりて一切の所求を滿足せしむる意。玄非譯。【業師經】に「第二大願願我來世。得菩提時。若諸有情。貧無衣服。蚊蛇蟻熱。晝夜逼惱。若即我身。專念受持。如其所好。即得種種上妙衣服。亦得二切寶莊嚴具。華鬘塗香。鼓樂衆伎。隨心所覓。皆令滿足。【十訓抄】皆令滿足うたがはず。
カイレン 開蓮 〔譬喻〕花開蓮現の略。天台。法華經題の蓮華に就て三輪を立てし中の第二輪にて、開權顯實の意を示したるもの。【玄義一上】に「華開蓮現。可驗開權而實。」【玄義七下】に「二華開故蓮現。而須華葉蓮。譬權中有實。而不能知。今

カウ 綱 〔職位〕僧綱の略。僧正僧都律師を僧綱カウアン 香案 香爐の机。香煙臺。【行事鈔二衣篇】に「經案香案經函之類。」
カウイン 香印 〔雜名〕香案に同じ。カウテン に見よ。【象器論十九】に「希曼曇律師廣錄房十事香印頌云。要識分明古案。二槌打得完全。燒炷旃檀牛糞。稍備鼻孔校察。」
香字香印 〔術語〕香を以て阿彌陀の種子の形を作りしもの。親自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生熏眞如法】に「於其境中。安置香爐。其香爐含攝觀自在周遍法界之相。以何爲相。即其香印。應作三紇哩文。其梵文是也。乃我作其圖。」
カウウ 香雲 〔雜名〕香煙雲の形を爲すもの。【最勝王經六】に「所有種種香雲香蓋。皆是金光明最勝王威神之力。」
カウエ 香衣 〔衣服〕勸許の色衣。元と香木を

開權顯實。意須甲於權也。
開蓮之文 〔雜語〕法華經のこと。
カイロ 開爐 〔行事〕禪林には陰曆十月一日爐を開き、此日方丈に大相看あり。【數修清規月令須知】に「十月初一日開爐。方丈大相看。」
カイワツジユ 戒和尚 〔術語〕正しく戒を授くの本主を戒師又は戒和尚と云。餘師は盡く助手なり。【三師七證】を見よ。和尚、又、和上と書す。弟子、師を呼ぶの稱。「ワツヤウ」を参照せよ。【太平記七】「あわれ天台座主の戒和尚の一やと見え給ひけれ。」
カイケンジュ 戒院主 〔職位〕戒院は禪林の食物を管理する所。主は其の管事なり。【禪苑清規】に「戒院主之職。主院門收雜買賣。」
カイエ 開會 〔術語〕開は方便の方便たることを明に打ち開くと。會は其方便は即ち眞實の法なりと方便を眞實に和會すること。例せば【法華經方便品】に於て三乗教は方便の説なりと斷定せし所は開にて、經文に之を開方便門と云。又、三乗教は一乘の上にて始めて分別せしもの。一乘の外に三乗なし、三乘即ち一乘なりと説く所は會にて、經文に之を示眞實相と云。依て開顯と云も同じ。是れ法華經一部の主意【四教儀】に「開前頓漸。會入非頓非漸。故言開權顯實。【カイケン】を見よ。
カイエ 契會 〔術語〕契當し會合して乖角なきと。唯識論三に「遠離二邊。契會中道。【十地義記一本】に「妙捨有無契會中道。」
カイエ 海會 〔譬喻〕聖衆會合の座を云。徳の深と數の多を海に譬ふ。【華嚴玄疏一】に「言海會二者。以深廣二故。謂普賢等衆。德深齊佛。數廣刹塵。故稱爲海。【密密鈔】に「海會衆也。【華嚴經傳記一】に

以て染めたる故名。後に轉じて種種の色となれり。但し合密等の所用は赤に黃を帶びたるものなり。禪宗濟家にては黃色。洞家にては種種あり。淨土宗にては紫紺の外皆通じて香衣と名く。但し藍色を除く。【啓蒙隨錄二】按に香衣は香染の衣を云。カウツメ」を見よ。
カウエン 香縁 〔術語〕香は佛の使にて至らざる所なきを云。【文粹十四】に「既曰三條何隔何鼻。」
カウエン 香煙 〔雜名〕佛に供ふる香の烟。賢愚經六に「香烟如意。乘虛往至世尊頂上。相結合衆。作二烟蓋。【平家】香烟騰燒して。」
カウオンジン 香音神 〔天名〕乾闥婆神のこと。カウジン」を見よ。
カウカイ 香海 〔雜語〕香水の海。須彌山を圍繞せる内海は盡く香水なりと云ふ。此に二あり。一は蓮華藏世界の香水海。【華嚴經八】に「彼須彌山微塵數風輪。最在上者名殊勝威光藏能持普光摩尼莊嚴香水海。此香水海。有二蓮華。【探玄記三】に「爲異二彼染土。顯烈海故。云三香水海也。」更には娑婆世界の香水海。俱舍論十一に「妙高爲初輪圍最後中間八海。前七名内。七中皆具八功德水。【佛祖統記三十一】に「第一香水海。橫廣八萬由旬。第二香水海。四萬由旬。第七香水海。一千二百五十由旬。【法華玄贊序】に「騰香海二而津二八萬。」
カウコウ 迎講 〔行事〕彌陀來迎の儀式を演ずる法會にて慧心僧都始めて之を華嚴院に行ひ、寬印供奉之を後丹後の橋立に行ひ丹後迎講と稱す。【古事談二】に「迎講者慧心僧都始給事也。三寸小佛を脇足の上立て脇足の足に緒を付て引寄引寄して涕



(圖略印香字哩花)

式を行ふべきを、場所不便なる故、葬所に於て此等の式を整へん爲に設くる處を指す。即ち龕前の法式を修する堂と云ふこととなるべし。但し漢土になし、此方後世の施設なり。

龕前疏【雜名】龕前にて讀む疏文。【百丈清規】に「郷人法俗作祭文」と云ふ、是なり。

ガン雁【動物】梵語、互婆、譯、雁(互婆は Hsya-pa を云ふ。ハムサは鴨なり。通名として雁にも用ふ。雁の梵名 Dhakataka なり。)

雁爲比丘落命【傳説】雁塔を見よ。

五百雁聞佛法生天【傳説】佛波羅捺國に在て四衆の爲に法を説く。時に空中五百の群雁ありて佛の音聲を聞いて之を愛樂し、世尊の所に來下せんとす。時に獵師ありて羅を設く。五百の群雁羅に墮りて獵師の爲に殺され、聞法の功德によりて切利天に生ず。【賢愚經】十三五百雁群聞佛法生天品、經律異相四十八】

雁不食出籠【傳説】國王雁肉を得んと欲し籠を以て之を養ふ、中に食はざるものあり、諸羅謂て言く何ぞ食はざる。食はざるもの言く、愛て食ふと能はずと。七日にして瘠瘦し、籠孔の中より出づるを得て飛び去る。遂に肥者に謂て曰く卿等食を食る。害痛後に在りと。【譬喻經】六、經律異相四十八】

五百雁爲五百羅漢【本生】【報恩經】四に「昔國王あり、雁肉を得んと欲し、獵師をして雁を捕らしむ。時に五百の群雁ありて虚空を過ぎ、雁王誤て網中に落つ。獵師大に喜び取て之を殺さんとす。一雁あり、來て悲鳴して雁王に投ず。五百の群雁亦た虚空に徘徊して去らず。獵師之を見て

の種子。不動尊眞言の最後に在り。【大日經疏】十に「用後二字爲種子。諸句義皆成此也。」

ガンモクノイミヤウ 眼目異名【釋名】名は異なるも其實の同じきを眼も目も名は異なるも其實の同じきに例していふ。【俱舍論】一に「一切眼諸眼目異名。同二十に「性之與體。眼目異名。」

ガンモン 鴈門【雜語】佛を鴈王と云ふより佛門を鴈門と云ふ。【本朝文粹】中書「敬皇鴈門之師。講演驚峰之傷。」因「人名」淨土論註の記主梁の曇鸞の稱號。師は鴈門の人なるを以てなり。唐高僧傳六に「釋曇鸞。或爲釋。未詳其氏。鴈門人也。」

ガンリヤウ 含靈【術語】靈魂を含むもの。含識。含生。有情など同じ。【大實經】三十八に「假令三界諸含靈。一切變爲聲聞衆。」

ガンルキ 含類【術語】含識の衆類。諸の有情を云ふ。【大唐三藏聖教序】に「微言廣被極含類於三途。遺訓遐宣導群生於十地。」

ガンノウ 鴈王【雜名】佛の異名。鴈王に同じ。佛の三十二相中、手足の一一の指の間鴈の如く、鴈の如く縷網ありて交絡するを以てなり。【智度論】四に「五者手足指縷網相。如三鴈王。張指現。不張則不現。」

キ

キ機【術語】根機、機縁など熟し、本來自己の心性に有し教法の爲に激發されて活動する心の働を云ふ。【玄義六上】に「機有三義。一者機是微義。故易云。機者動之微也。先現又阿含云。衆生有善法機。聖人來應也。衆生有將生之善。此善微將レ動。而

雁王を殺すに忍びず之を放ち去らしむ、國王之を開きて雁肉を斷つ。爾の時の王は今の阿闍世王、雁王は佛、一雁は阿難、五百の群雁は五百羅漢なり。【善見律】十に「高閣講堂者。於天林作レ堂。堂形如三雁子。一切具足。爲佛作此堂也。」

ガンクワウギキ 含光儀軌【書名】毘那夜迦誡那鉢底瑜伽悉地品秘要、一卷、不空の弟子含光記す、之を合光儀軌と云。

ガンケ 含華【術語】極樂に往生するに九品の差別ありて、其の上品上生の人を生れながら七寶の開蓮華に坐して、妙法を聞けども、上品中生より已下は一宿乃至下品下生の人十二大劫を経て花方に開く。其の花中に含まれて三寶を見聞すると能はざるを含華と云。【觀經定善義】に「雖得往生含華未出。或墮邊界。或墮宮胎。」

ガンシキ 含識【術語】心識を含有するもの。即ち有情。【行事鈔】持記上四之一に「心依二色中。名爲含識。總攝六道有情之衆。」

ガンシヤウ 含生【術語】生命を含有するもの。含靈に同じ。【西域記】十二に「捨二輪而臨二制法界。一に「是身易壞。猶如三河岸。臨峻大樹。」「慈恩傳九」に「衆縁和合。念念無常。雖三岸樹非藤。不足レ以修危脆。」

ガンジヤウ 含情【術語】情識を含むもの。含生に同じ。【法華疏】上に「悲智雙行。不捨含情。」

ガンジュ 岸樹【釋名】人命の危に譬ふ。涅槃經に「是身易壞。猶如三河岸。臨峻大樹。」「慈恩傳九」に「衆縁和合。念念無常。雖三岸樹非藤。不足レ以修危脆。」

ガンシヨ 雁書【本生】佛の前生譚。往昔波羅捺王摩訶羅闍の二子、善友惡友と名く。兄如意珠を得て國

得爲レ機。乃如レ發有可發之機。放射者發之。發之箭動。不發則不前。衆生有可生之善。故聖應則善生。不發則不生。故言機者微也。二者古法楞迦經云。機是關義。何者衆生有善有惡。關。聖慈悲。故機是關義也。三者機是宜義。如欲拔。無明之苦。正宜於悲。欲與法性之樂。正宜於慈。故機是宜義也。【會本文句記】十に「問。機器何別。答。雖並從機。各有二意。機論。可發。器謂。堪任。」「因眞理に契合する機關。【大明鏡】に「文義俱明者謂之理。忘レ言獨契者謂之機。」

キ器【釋名】根器、器量など。人の根性を物に譬て器と云。【法華經提婆品】に「女身垢穢。非是法器。」「名義集】二に「五道非成佛器。由是諸佛唯出二人間。」

キ記【術語】「キベツ」を見よ。因 經論の註釋を云ふ。俱舍の光の記と云ふ如し。

キ忌【術語】物いみなり。又物いみの目を云ふ。喪中又は命日に心身を慎むこと。キテツ參照。

キ鬼【異類】梵語。譯。多。Preta 舊譯。餓鬼。新譯。鬼。【名義集】二に「婆沙云。鬼者畏也。謂虛怯多畏。又威也。能令三他畏其威也。又希求爲鬼。謂彼餓鬼。恆從他人希求飲食。以活。性命。」「文句四下」に「鬼者。胡言。開聚多。謂。開。聚。衆。言。祖。父。衆。生。最。初。生。二。道。二。故。名。三。祖。父。後。生。者。亦。名。三。祖。父。又。懷。貪。墮。此。趣。此。趣。多。饑。渴。故。名。三。餓。鬼。亦。被。諸。天。驅。使。亦。希。望。飲。食。故。名。餓。鬼。鬼。に。種。類。多。し。或。は。夜。叉。羅。刹。の。如。く。通。力。を。有。し。人。を。害。す。る。もの。或。は。餓。鬼。の。如。く。常。に。飢。渴。に。苦。む。もの。此。の中。六。趣。中。の。鬼。は。餓。鬼。に。付。て。之。を。説く。」「ガキ」を見よ。

三種鬼【名數】一に精魅鬼。半夜の子刻に子

人。を恤まんと欲し、弟惡友と共に大海に入りて珠を得たり、弟之を嫉み珠を奪ひて兄の眼を刺し、歸りて水に没せりとなす。父母慟哭す。後兄の眼恢復し利師跋國に在り。宮廷初め一白雁を飼ふ、其主の不幸を聞き悲鳴宛轉す。母夫人爲に書を作りて雁の頭に繫く、雁飛んで利師跋國に到り善友を見て飛鳴す。善友父母の悲哀を知り手書を作て又其雁に繫く、雁歸りて父母事情を察し、即ち惡友を捉縛し善友を迎ふ。其の時の惡友は提婆達多にして善友は今の佛なりと。【大方便佛報恩經】四品文】

ガンタフ 龕塔【書名】西域記九に「有二窟塔波。謂互婆。互婆。唐言雁。昔此伽藍。習習觀小乘。小乘漸衰也。故開三淨之肉。而此伽藍。邈而不墜。其後三淨。求不時獲。有比丘五。經行。忽見群雁。飛翅。驚言曰。今日來僧中。食不充。摩訶薩埵。宜知。是時。言聲未絕。一雁退飛。當其僧前。投身自殞。比丘見已。具白衆僧聞者悲感。咸相謂曰。如來設法。導誘障機。我等守レ恩。遵行漸衰。大乘者正理也。宜改二執。一務從中。聖旨。此雁垂レ誠。誠爲明導。宜旌厚德。傳記終古。於是建窟塔波。式照遺烈。以二彼死雁。極其下焉。」

ガンタフ 龕塔【書名】窟室を有する塔。即ち常の塔なり。【十誦律】五十六に「佛聽作龕塔柱塔。」

ガントウ 巖頭【人名】唐の鄂州巖頭的全僧禪師、徳山に參して旨に契ひ、巖頭に住む。武宗の法教に値ひ隠れて渡子となる。後に河の臥龍山に庵し徒衆輻湊す。光啓三年入寂。勅して清巖禪師と諡す。【傳灯錄】一六に「於二生死岸頭。得二自在。」

ガンマン 哈鏡【術語】ハハチ。Vaidya 不動尊

鼠等の精靈變化して坐禪の人を厭媚するなり。或は少男少女老病の形及び可畏等の相を作す。此時禪人各其時を識り却て來らば鼠獸なるを知り其の名字を呼ばれ精媚即ち散すと(止觀入之三に時媚鬼と作る)。二に悼怖鬼。三に魔鬼。是れ第六天の魔屬なり。【波羅羅撥次法門】四】

鬼黏五處【本生】【智度論】十六に「精進相者。身心不休息故。譬如釋迦文佛。先世曾作一買客主。將二諸買人。入二險難處。是有二羅刹鬼。以手遮之。言。汝住莫レ動。不聽。汝去。買客主即以二右拳擊之。拳即著鬼。鬼不レ可離。復次左拳擊之。亦不レ可離。以右足蹴之。足亦黏着。復以左足蹴之。亦復如是。以頭衝之。頭即復着。鬼問言。汝今如是。欲作何等。心休息未。答言。雖二復。五事被レ擊。我心終不レ爲汝伏也。當以精進力與。汝相擊。要不得退。鬼時歡喜。心念。此人膽力極大。即語人言。汝精進力大。必不二休息。故レ汝令レ去。」「止觀」に「如三論釋。精進。鬼黏五處。」

キイ 奇異【雜語】常ならぬこと。【十地論】一に「若來此處。則非奇異。」「唐太宗三藏聖教序】に「鹿苑驚峰。瞻仰仰異。」

キウ 祈雨【修法】請雨法を修すること。セウウホフを見よ。

祈雨法【修法】「セウウホフ」に同じ。

キウクワアンジャ 供過行者【職位】供頭行者の別稱。象器箋八】クカアンジャと讀む。

キウクウ 龍宮【雜名】龍宮に同じ。龍樹菩薩龍宮に入て華嚴經を誦出す。【三論大義鈔】に「印城探三藏之遺致。此宮研方等之幽趣。」

キウコウ 宮講【行事】宮中の講經。舒明天皇十

「鼓を打つ」とを解すなり。禾山一日、僧肇の寶藏論の語を引き垂示して曰く「習學謂之聞、絶學謂之鄰。真に近、過此二者、是爲眞過。」と僧出でて問ふ、如何なるか是れ眞過。山云く「解打鼓又問ふ、如何なるか是れ眞諦。山云く「解打鼓又問ふ、即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛。山云く「解打鼓又問ふ、向上の人來る時如何んか接せん。山云く「解打鼓」之を禾山の四打鼓と云。

【昇殿四十四則會元六】

クワシ 掛子 「衣服」 「クワス」を見よ。

クワシ 聖窟 「物名」 椅子の背後を遮る板屏なり、依て聖窟椅子と云。【象器箋十九】

クワシホフ 火祠法 「修法」 外典淨行園陀Attha pravada 論中に火祠の法あり、大乘真言門に亦火法あり。然る所以は一類を攝伏せんが爲に、佛の園陀を以て之を攝伏するなりと。【大日經疏十九、同義釋十四】經疏には火法四十四種と説けども其の列ねる所は二十七のみ。「クワシ」を見よ。

クワシヤ 火車 「雜名」 罪人を載せて地獄に運ぶ車。車より火を發するもの。【智度論十四】に提婆達多の佛を傷けんとして生ながら地獄に入るを記して「復以惡毒。著指爪中。欲因禮佛以中傷佛。欲去未到。於王舍城中。地自然破裂。火車來迎。生入地獄。」觀佛三昧經五に「佛告阿難。若有二衆生。殺父母。罵辱六親。是罪者。命終之時。銅狗張口。化爲火車。狀如金車。寶蓋在上。一切火燄。化爲玉女。罪人遙見。心生歡喜。我欲往中。我欲往中。風刀解時。寒急失聲。寧得好火。在車上坐。然火自燃。作是念。已。即便命終。揮擯之間。已坐金車。願贖玉女。皆捉鐵斧。斬截其身。

クワシヤ 火蛇 「雜名」 火を吐きて罪人を迫害する地獄の蛇。【楞嚴經八】に「火蛇火狗」云々。クワシヤウ 果上 「術語」 修行の間を因位と云ひ、修行の功に依て證りを得たる位を果地と云ふ。此の果地は因位の上なれば又果上と云ふなり。

果上の法門 「術語」 大悲の加持力に依て因位の人も聞くとを得べきも、其實は唯佛與佛の法門にして菩薩已下の當分にあらずる甚深の教法を云。【法華經方便品】に「唯佛與佛。乃能究盡諸法實相。」【大日經疏一】に「如是智印。唯佛與佛乃能持之。」

クワシヤウ 火淨 「術語」 五種淨食の一。一切瓜果等の物、先づ火を以て燒煮して熱せしめ、後に方に食するを火淨食と云。【有部毘奈耶雜事三十六、三藏法數二十四】

クワシヤウ フクネン 火盛不久燃 「雜語」 歌題【罪業應法經偈】に「水流不常滿。火盛不久燃。日出須臾沒。月滿已復缺。」(○千載)煙だにしばしたなびけ鳥部山立別れにしかたみとも見ん

クワシヤウ ミヤウガウ 果上名號 「雜名」 因位の顯行に相應して證得果上の如來となりし時、その功德を以て成就したる名號を云ふ。

クワシユ 火聚 「術語」 猛火の聚積。罪業に依て地獄に於て感ずる所。【正法念經十一】に「彼不善業。作而復集。勢力堅鞏。所得果報。有大火聚。中彼人所作惡業勢力。急擲其身。墮彼火聚。」人身の聚ふべく怖るべきを火聚に譬ふ。【涅槃經四】に「自觀已身。猶如火聚。是名自正。」【廣悲を譬ふ。涅槃經十五】に「此心難得調伏。如火聚。其明久住。電光之明。不得暫停。願如火聚。慈如電明。」

クワシヤウ 身下火起。如旋火輪。【太平記二〇】「火車に罪人一人をのせて」

クワシヤ 火舎 「物名」 香爐の一種。金屬にて製し、二重の輪ありて蓋を付く。

クワシヤウ 和尙 「術語」 天台宗にはクワシヤウと讀み、法相宗律宗にはワジヤウと讀み、禪宗にはオシヤウと讀む。又律宗には上の字を用ゆる餘は皆尙の字を書く。譯、力生。親教師。近師など。「ワジヤウ」を見よ。

クワシヤウ サンマイ 火生三昧 「修法」 不動尊の三昧にて身より火燄を出だすもの。底唯三昧耶經上に「不動亦自身遍出火燄光。即是本尊。自住火生三昧。」因「此眞言行人。亦於諸尊。若欲作降伏。即須自身作無動尊。住於火輪中。亦名火生三昧也。」【義釋七】に「囉。字門は是れ思慮遮那の大忿怒の火なり、能く一切の世界を燒て灰燼餘りならしむ。今不動尊は此の火中より生ず、猶軍荼利尊の執金剛の火の中より生ずるが如し。天神の權化が、護摩の灰中より化生することありとするは、印度の古代よりの傳説に見ゆ。

クワシヤウ チヤウジヤ 火生長者 「人名」 樹提伽長者の別稱。ジュナイカを見よ。

クワシヤク 掛錫 「雜語」 錫杖を懸くる義。僧の止住するを云。掛塔に同じ。【祖庭事苑八】に「西域比丘。行必持錫。有二十五威儀。凡至室中。不得著地。必掛於壁牙上。今僧所止住一處。故云掛錫。」

クワシユ 火珠 「物名」 塔上の寶珠なり。

クワシユ ヨジ 火種居士 「流派」 事火婆羅門の通稱。佛弟子、薩連尼婁子を指して火種居士と呼ぶ。

クワシヤウ 火聚佛頂 「佛名」 釋迦如來の隨身五佛頂尊の一。ブツチャウを見よ。

クワス 掛子 「衣服」 禪僧の懸くる袈裟の名。掛絡に同じ。【傳燈錄慧目章】に「不披袈裟。不受三具戒。唯以雜彩爲掛子。」

クワス キ 果途 「術語」 希望を果して遂ぐること。果途願 「術語」 阿彌陀佛四十八願中第二十の願名。無量壽經上に「設我得佛。十方衆生。聞我名號。係念我國。植諸德本。至心廻向。欲生我國。不果途者。不取正覺。」

クワセツ 跨節 「術語」 天台の名目。諸經の當意に就て教意を判するを當分と云ひ、法華經の意より餘經の意を定むるを跨節と云。例へば阿含經は生死の苦を離れて涅槃に入らしむる爲に説くと云ふは當分の意なり。大乘の佛果を得せしめん爲の階級に、方便として之を説く、其本意は佛果に在りと判ずるは跨節の解釋なり。依て當分を以て法華の相待妙を成じ、跨節を以て法華の絕待妙を成す。當分は方便の施設、跨節は佛の本意なり。【玄義一下】に「當分者。如三藏佛。趣種種機。說種種教。中二跨節者。何處別有四教主。各各身。各各口。各各說。【同釋經三】に「若依施權。即當分義。若據佛意。即跨節義。」又「當分通於一代。於今便成相待。跨節唯在二今經。佛意非一適今也。」又「當分乃成今經相待義。跨節乃成今經開權義。」

クワタ 掛搭 「語」 又、掛搭に作る【正韻】に「掛與掛同。懸なり。搭は附なり。挂なり。禮僧の止住するを掛搭と云。衣鉢袋を僧堂の鈎に懸くるなり。依て住持が脚人の依住を許すを掛搭を許すと云。掛錫。掛鉢など同じ。【象器箋九】クワシヤクを見よ。

クワシヨウ 果證 「術語」 因位の修行に依て得たる果地の證悟。【慈恩寺傳序】に「示之。以之。因修。明之。以果證。」

クワシヨウ 華鐘 「物名」 梵鐘の異名。

クワシヨウ 果卓 「物名」 菓籠を置く卓凡。俗に呼て膳となすもの。大德寺には之を和卓と稱す。【象器箋二十】

クワシン 果脣 「雜名」 佛の唇類婆果の如く赤好なるを云。【法華經妙莊嚴王品】に「唇色赤好。如三頻婆果。」【廣弘明集十三】に「果脣華目」

クワシン 掛眞 「雜語」 眞は眞儀、尊宿の肖像。肖像を掛くるを掛眞と云。【象器箋十四】

クワシン 火神 「神名」 又、火天。火尊と云。火を司る神。大日經世世世護摩品に毘陀經の火神四十四種と、内法の火神十二種を擧ぐ。其毘陀の四十四種は大梵王を始とし、其名と用法とを示して其の形像を説かず、内法の火神十二神は之を説けり。故に【大日經疏二十】に毘陀の火神に對して「若論其世間火天。作梵王形」とのみ云へり。

クワシキ 火食 「修法」 護摩を云。供物を火に投じ諸尊に供養する是れ護摩法なればなり。

クワシキケ 火食灰 「雜名」 護摩の灰なり。

クワタクウ 火湯 「界名」 地獄の一處。【千手經】に「我若向火湯。火湯自消滅。」

クワタク 火宅 「譬喻」 三界の生死を火宅に譬ふ。【法華經譬喻品】に「三界無安。猶如火宅。眾苦充滿。甚可怖畏。常有生老病死憂患。如是等火。熾然不息。」(○曲、東北)我も火宅を出てにけるかな

火宅喻 「譬喻」 法華七喻の一。【法華經譬喻品】に「大長者あり、其年衰邁せり、財富無量にして多し。田宅及び諸の僮僕あり。其家廣大にして唯一門あり。中忽然として火起り、宅を焚燒す。長者の諸子若し二十、或は三十に至り、此宅中に在り。中火宅の内に於て嬉戯に樂着して覺らず知らず驚かす怖れず。火來て身を逼め苦痛已切なるも心に厭ひ患へず、出づることを求る意なし。中爾の時長者即ち是の念をなす、是の舎已に大火の爲に燒かる、我れ及び諸子若し時に出でずんば必ず燒く所とならん、今當に方便を設けて諸子等をして斯の害を免かることを得せしめんと。父、諸子の先心に各好む所あり、種種の珍玩奇異の物には情必ず樂着するを知り、而して之に告て言く、汝等が玩好する所は希有にして得難し、汝若し取らざんば後に必ず憂悔せん、此の如きの種種の羊車鹿車牛車今門外に在り以て遊戯すべし、汝等此火宅に於て宜く速に與て來るべし、汝が欲する所に隨つて皆當に汝に與ふべし。爾の時諸子父の説く所の珍玩の物を聞き、其願に適ふが故に心各勇銳し、互に相推排し、競て共に馳走走り、争て火宅を出づ。中爾の時長者各諸子に等一の大車を賜ふ、其車高廣にして衆寶を以て莊校せり。中駕するに白牛を以てす、膚色充潔形體殊好なり。中是の時諸子、各大車に乗

るを許す、俗に石塔、塔婆、率都婆と云ふは此五輪塔を指すなり。○(曲、田村)まづ南に當つて塔婆のみえて候ふは「第七十九圖乃至第八十二圖参照」

塔の層級 〔雜語〕「探玄記八」に「長阿含經に依るに四人應に塔を起すべし、一に佛、二に辟支、三に聲聞、四に輪王なり。眞諦三藏十二因緣經を引て八人應に塔を起すべしと云ふ、一に如來、露盤八重已上、是れ佛塔。二に菩薩、七盤。三に緣覺、六盤。四に羅漢、五盤。五に那含、四盤。六に斯陀含、三盤。七に須陀洹、二盤。八に輪王、一盤なり。若し見るも禮するを得ず、聖塔にあらずるを以ての故なり。所引の十二因緣經今傳はず。凡僧あり、亦塔を起す、謂く持律法師、營事比丘、德望比丘應に塔を起すべし。既に聖人にあらず、總て露盤なし、仍て屏處に在らしむ、若し違へば罪を結ぶ。此等の文に準ずるに今方に師の爲に塔を造り廣く露盤を起すあり、直に現人罪を得るのみにあらず、亦乃ち彼の先亡を累はす深く悲む可し。」「後分涅槃經上」に「佛告阿難、佛敍涅槃奈思臨訖。一切四眾收取舍利、置七寶瓶。當於拘尸那伽城內四衢道中、起七寶塔。高三十三層。上有三輪。」「寄歸傳三」に「或有下收、其設利羅、爲亡人、作塔名爲俱擔、形如三小塔、上無輪蓋。然塔有凡聖之別。如律中廣論。」「毘奈耶雜事十八」に「佛言、應以磚兩重作基。次安三塔身。上安三覆鉢。隨意高下。上置平頭。高一二尺方二三尺。準三量大小。中堅三輪竿。次著三輪。其相輪重數或一、二、三、四乃至十三。次安寶瓶。乃佛告長者。若爲如來造窣祿波者。應可如前具足而作。若爲獨覺、勿令窣祿波。若阿羅漢相輪四重。不還至三。一來應一。預

應一。凡夫善人、但可平頭、無有輪蓋。已上十二因緣經に云ふ露盤は即ち後分涅槃經に云ふ層にして、級毎に四層を出だすもの、寄歸傳毘奈耶雜事に云ふ相輪は今の所謂九輪なり。即ち一は爲數に就き、一は相輪に就て差別を論ずるなり。〔資持記下一之四〕に「露盤即四層也。乃凡僧不得出」露安を級。今有出露者、由レ不知敬。借可上聖。乃私輪者。圓輪鑿出。以爲表相故也。故に凡聖も相輪を許さる。」「行事鈔下一之四」にも上出探玄記所引の僧祇律を引用してこれを辨す。されば相輪を露盤と云ひ、或は覆鉢下の斗形を露盤と云ふは經意にあらず。

造塔 〔雜語〕「十誦律五十六」に「起塔法者。給孤獨居士深心信佛。到佛所、頭面禮足、一面坐。白佛言、世尊。世尊遊行諸國時。我不見世尊。故甚渴仰。願賜一物。我當供養。佛與三爪髮。言。居士。汝當供養此爪髮。居士即時白佛言。願世尊聽我起一髮塔。佛言。聽起一髮塔。名是起塔法。」「高僧傳」に「康僧會。吳赤烏十年至建康。孫權令求舍利。既得之。權爲造塔。晉帝過江。更修飾之。此中國造塔始也。」「日本紀」に「敏達天皇十四年。馬子宿禰起塔於大野丘北。即去年司馬達等於齋食上。所獲舍利藏塔柱頭。是我朝塔之始矣。」「印度起塔の始は四分五分の律によれば成道の時に世尊を供養せし二人なるが如くにも見ゆ。今これを採求しがたし。)

天上四塔 〔名數〕「帝釋天佛の四塔を建つ。一に箭塔、佛太子たるとき帶ひし所の一箭を取て塔を建つ。二に髮塔、太子出家せしときの髮を取て塔を建つ。三に蓋塔、佛將に成道せんとするとき牧女

流應一。凡夫善人、但可平頭、無有輪蓋。已上十二因緣經に云ふ露盤は即ち後分涅槃經に云ふ層にして、級毎に四層を出だすもの、寄歸傳毘奈耶雜事に云ふ相輪は今の所謂九輪なり。即ち一は爲數に就き、一は相輪に就て差別を論ずるなり。〔資持記下一之四〕に「露盤即四層也。乃凡僧不得出」露安を級。今有出露者、由レ不知敬。借可上聖。乃私輪者。圓輪鑿出。以爲表相故也。故に凡聖も相輪を許さる。」「行事鈔下一之四」にも上出探玄記所引の僧祇律を引用してこれを辨す。されば相輪を露盤と云ひ、或は覆鉢下の斗形を露盤と云ふは經意にあらず。

法身塔 〔雜語〕「法身佛を書して藏めしもの。」「寄歸傳四」に「或積爲聚。以磚裹之。即成佛塔。或置三空野。任其銷散。西方舍利。不以此爲業。乃當作之。此時中安二種舍利。一謂大身骨。二謂緣起法。其須曰。諸法從緣起。如來說是因。彼法因緣盡。是大沙門說。」「ホフシツケ」参照。

四處立塔 〔雜語〕「諸佛の當法四處に支提を立つ。一に生處、二に得道處、三に初轉法輪處、四に涅槃處。」「法苑珠林三十七」

八大靈塔 〔名數〕「一に迦毘羅城の龍尼園、二に摩伽陀國の尼連河邊、三に波羅奈城の鹿野苑、四に舍衛國の祇園、五に曲女城、六に王舍城、七に廣嚴城、八に拘尸那城。」「八大靈塔名號經、八大靈塔塔婆」

八萬四千塔 〔故事〕「阿育王の立てし所。」「多寶塔」堂塔「タホウタツ」を見よ。

寶篋印塔 〔堂塔〕「寶篋印陀羅尼を藏むもの。五輪塔、密教の所説。五輪は地水火風空の五大にて、大日如來の三昧耶形なり。五大の形は次第の如く方、圓、三角、半月、圓形、五大の種子は阿婆羅漢法なり。ゴリンジャウシツ」を見よ。

タフイン 塔印 〔印相〕「塔は大日如來三昧耶形の法印なれば塔印と云ふ。又手に塔形の印相を結ぶ。」「ソトバイン」を見よ。

塔印文字形 〔雜語〕「口決に云く塔印風空合するは即ち文字の形なり、是れ即ち兩部の水大なり、萬物の生長するは悉く皆水大の所生なるを顯はすなり。大師の釋に云く、雙圓性海恒觀四曼、自性、重如月殿鎮鏡三密自樂。」

タフカウ 答香 〔儀式〕「タツカウ」と讀む。禪林の親に來賓我が爲に辨香を爐に挿すれば我亦彼が爲に挿むを答香或還香と云ふ。」「象器箋九」

タフサツアラウ 塌薩阿勞 〔雜語〕「塌薩は不獨の義、其事に關はるなり、阿勞は阿は發語の助辭、勞は勞擾にして事に關して苦勞するさま、人の動作を嘲る詞なり。」「服天方語解」に「塌薩、塌薩と同じ、唐音通するなり、山谷集に出づ。註に物不レ獨也。對人語とあり。」

タフザウ 塔像 〔術語〕「塔と佛像。」「無量壽經下」

タウシユ 塔主 〔職位〕「タツ」と讀む。

タフジケンゴ 塔寺堅固 〔術語〕「五堅固の一。佛滅第四の五百年、堅固に塔寺を造立する時期なり。」

タフジヤウ 踏床 〔物名〕「椅子の前に足を承くる小几なり、又脚凳と云ふ。毘奈耶雜事に承足牀、僧祇律に承足机に作る。」「象器箋十九」

タフチエウ 塔中 〔術語〕「塔頭の借字。タツテウ」

タフチエウノシヤカ 塔中の釋迦 〔雜語〕「釋迦如來多寶塔中に入て全身舍利の多寶如來と半座を分て坐し、以て提婆品以下を説く。」「法華經見寶塔品」

タフチエウノフツク 塔中の付屬 〔故事〕「釋迦如來多寶塔中に在て地涌の諸菩薩に對して本門の法華を付屬す、囑累品の所説はなり。」

タフバ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

より乳糜を受けし蓋を取て塔を建つ。四に佛牙塔、佛を茶思せしとき佛牙を取て塔を建つ。」「佛本行集經十三、十九、三藏法數十三」

舍利塔 〔堂塔〕「佛舍利を藏むもの。若し舍利なければ之を支提と稱し、單に靈場古蹟を表する爲に立つ。)

法身塔 〔堂塔〕「法身佛を書して藏めしもの。」「寄歸傳四」に「或積爲聚。以磚裹之。即成佛塔。或置三空野。任其銷散。西方舍利。不以此爲業。乃當作之。此時中安二種舍利。一謂大身骨。二謂緣起法。其須曰。諸法從緣起。如來說是因。彼法因緣盡。是大沙門說。」「ホフシツケ」参照。

四處立塔 〔雜語〕「諸佛の當法四處に支提を立つ。一に生處、二に得道處、三に初轉法輪處、四に涅槃處。」「法苑珠林三十七」

八大靈塔 〔名數〕「一に迦毘羅城の龍尼園、二に摩伽陀國の尼連河邊、三に波羅奈城の鹿野苑、四に舍衛國の祇園、五に曲女城、六に王舍城、七に廣嚴城、八に拘尸那城。」「八大靈塔名號經、八大靈塔塔婆」

八萬四千塔 〔故事〕「阿育王の立てし所。」「多寶塔」堂塔「タホウタツ」を見よ。

寶篋印塔 〔堂塔〕「寶篋印陀羅尼を藏むもの。五輪塔、密教の所説。五輪は地水火風空の五大にて、大日如來の三昧耶形なり。五大の形は次第の如く方、圓、三角、半月、圓形、五大の種子は阿婆羅漢法なり。ゴリンジャウシツ」を見よ。

タフイン 塔印 〔印相〕「塔は大日如來三昧耶形の法印なれば塔印と云ふ。又手に塔形の印相を結ぶ。」「ソトバイン」を見よ。

塔印文字形 〔雜語〕「口決に云く塔印風空合するは即ち文字の形なり、是れ即ち兩部の水大なり、萬物の生長するは悉く皆水大の所生なるを顯はすなり。大師の釋に云く、雙圓性海恒觀四曼、自性、重如月殿鎮鏡三密自樂。」

タフカウ 答香 〔儀式〕「タツカウ」と讀む。禪林の親に來賓我が爲に辨香を爐に挿すれば我亦彼が爲に挿むを答香或還香と云ふ。」「象器箋九」

タフサツアラウ 塌薩阿勞 〔雜語〕「塌薩は不獨の義、其事に關はるなり、阿勞は阿は發語の助辭、勞は勞擾にして事に關して苦勞するさま、人の動作を嘲る詞なり。」「服天方語解」に「塌薩、塌薩と同じ、唐音通するなり、山谷集に出づ。註に物不レ獨也。對人語とあり。」

タフザウ 塔像 〔術語〕「塔と佛像。」「無量壽經下」

タウシユ 塔主 〔職位〕「タツ」と讀む。

タフジケンゴ 塔寺堅固 〔術語〕「五堅固の一。佛滅第四の五百年、堅固に塔寺を造立する時期なり。」

タフジヤウ 踏床 〔物名〕「椅子の前に足を承くる小几なり、又脚凳と云ふ。毘奈耶雜事に承足牀、僧祇律に承足机に作る。」「象器箋十九」

タフチエウ 塔中 〔術語〕「塔頭の借字。タツテウ」

タフチエウノシヤカ 塔中の釋迦 〔雜語〕「釋迦如來多寶塔中に入て全身舍利の多寶如來と半座を分て坐し、以て提婆品以下を説く。」「法華經見寶塔品」

タフチエウノフツク 塔中の付屬 〔故事〕「釋迦如來多寶塔中に在て地涌の諸菩薩に對して本門の法華を付屬す、囑累品の所説はなり。」

タフバ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

タフカウ 塔婆 〔術語〕「タフ」を見よ。

經軌 〔術語〕 佛說大方廣曼殊室利經、一卷。金剛頂經多羅菩薩念誦法、一卷。【開快十一】(1060) 聖多羅菩薩經、一卷。成(800)聖多羅菩薩一百八名陀羅尼經、一卷。成(810)聖多羅菩薩梵讚、一卷。成(1009) 十三(1009)

タラヤトウリヤウンヤ 多羅夜登陵舍 〔界名〕 譯、三十三。天の名。「タウクテン」を見よ。

タラヤヤ 恒羅夜耶 〔術語〕 譯、三。囉恒那恒羅夜耶。Kamukaya は三寶なり、與格。「仁王良寶疏下」に「恒羅夜耶。此云三。」

タラマセン 恒囉麼洗 〔雜語〕 麼洗は月の義、恒囉麼洗は正月なり【十二緣生祥瑞經】に「恒囉麼洗。【西域記二】に「制恒囉月。梵。Cāra-māsa」

タリキ 他力 〔術語〕 佛道に二方あり、自己所修の善根を自力とし、佛の本願力加被力を他力とす、此中一切の諸佛衆生の爲めに他力を有するも、殊に他力の一法を以て衆生の佛道を成ぜしむるは彌陀如来一佛なり。是れ所謂彼佛の本願なればなり、彌陀の本願に曰く、唯我を信ぜんものは我土に往生し、佛道を成ぜしめんと、故に自力を捨てて彌陀を信するものは此の本願に相應して自ら往生成佛の願果を成ずるなり。而して此信心亦佛の本願に依て發したるものなれば即ち他力なり、他力の信心を以て他力に攝せらるるなり。【淨土論中下】に「他力爲増上緣。又【如劣夫跨驢不上從轉輪王行便乘虛空遊四天下無所障礙。如是等名爲他力。】「教行信證二」に「言他力者如来本願力也。○盛衰記四八」忝なく彌陀他力本願を信ず

タリキシユウ 他力宗 〔流派〕 自力宗の對。他爲に刺落し爲に戒を説く、霞邊に耳を掩て越り去る。再び馬祖に謁して僧堂に入り聖僧の頸に坐す。馬祖曰く、我が子天然なり、即ち馬祖を拜して師の法號を賜ふを謝し因て天然と名く。長慶四年寂、壽八十六。智神師と勸諡す。【傳燈錄十四】

丹霞燒佛 〔故事〕 【五燈會元丹霞章】に「丹霞禪師嘗て洛東の慧林寺に到り、天寒に値ふ。遂に殿中に於て木佛を取て燒いて火に向ふ。院主偶見て呵責して云ふ、云何ぞ我木佛を燒くとを得る。師杖を以て灰を撥して曰く、吾れ燒いて舍利を取る。主云く木佛安んぞ舍利あらん、師云く既に舍利なし更に兩尊を請て再び取て燒かんと、院主自ら眉鬚墮落す。」

タンカノ丹霞 〔人名〕 鄂州丹霞山子淳禪師。青原下十二世の祖。芙蓉道楷禪師の法嗣。

タンカンエウサウ 探竿影草 〔術語〕 臨濟四喝の「臨濟録」に「有時一喝如探竿影草。」鶴の羽を編みて水中を探り、魚の一處に集るを待つて之を網するを探竿と云ひ、草を水中に浮ぶれば魚其影に集る之を影草と云ふ。以て善知識の學者を接待する善巧に譬ふ。【入天眼目註】に「探竿漁者具也。東禪羽二挿竿頭探水中。衆群魚於一處。然後以網漚之謂也。影草者刈草浸水中。則群魚潛影於後。以網漚之。是皆漁者聚魚之方便也。善知識於學者亦復如是。」

タンクウ 但空 〔術語〕 大小乘所見の空理に二種あり、小乘は諸法を分析して但だ空を見て不空を見ざれば但空と云ひ、大乘の菩薩は諸法を分析して空に歸せしめず、諸法は幻の如く夢の如しと當體其のままに空を見れば、空の中に自ら不空の理を存すれ

力往生を勧むる宗旨なり。タリキ」を見よ。タリキネンブツ 他力念佛 〔術語〕 自力の諸行に對して、念佛の行は佛の方に往生淨土の大功徳を成じ給ひて衆生に與へ給ひしものなれば、此の名あり。又、自力念佛に對して云ふ。念佛の功徳を淨土に廻向して往生せんとにはあらず、信心獲得の上にて佛恩を感謝する情念より口に佛名を稱するを云ふ。眞宗の念佛これなり。

タリシバリカ 但哩支伐離迦 〔術語〕 譯、三。三衣。十二頭陀行の一。【節宗記五本】タリヤタリシヤ 恒利耶但喇舍 〔界名〕 譯、三十三。天の名。「トウリ」を見よ。

タリリタノジンギ 他利他深義 〔術語〕 淨土論に「菩薩如是修三門行。自利利他。速得成就阿耨多羅三藐三菩提。故。」とあるを曇鸞は論註に於て「然覈求其本。阿彌陀如来爲増上緣。他利之與自利他。設有左右。若自佛而言。宜言自利他。自衆生而言。宜言他利。」と釋す。即ち自利他と云はず自利他と云ふは、他利は衆生が利益を得ることが主題となりて施利者の方難はれ難く、利他と云へば衆生を利する意を表として力を興ふる者を顯はす。佛が大願を建て自ら成佛して衆生を利益し給ふは自利他と云はざるべからずとの意なり。親鸞はこの論點を他利他の深義と名く。

タレイ多齡 〔明王〕 〔Haitoku-shō〕 多齡路迦吠闍の略。降三世明王の梵名【秘藏寶輪上】に「多齡三湯無明之波瀾。○盛衰記」に多齡三嗔の床の上には魔軍頭を振つて恐をなす。三嗔三嗔は降三世明王が貪瞋癡の三毒三世の怨敵を吞喰するを云ふ。

タレイサンカツ 多隸三喝 〔術語〕 多隸は多は之を不但空と云ふ。天台は之を二教に分配して但空を以て藏教とし、不但空を以て通教とす。【法華玄義】に「三藏二乘明但空爲極。譬頗梨珠一往似眞再研便爲。」

タンクウザンマイ 但空三昧 〔術語〕 但宗に執して不但空を知らざるを云ふ。

タンクワ 且過 〔雜名〕 タングワリヤウ」を見よ。タンクワソウ 且過僧 〔雜名〕 且過寮に宿泊する僧にて行脚の稱稱を云ふ。

タンクワリヤウ 且過寮 〔堂塔〕 禪林に行脚僧の宿泊處を云ふ。夕に來り宿して且に過ぎ去る義なり。遊方の人某寺に到れば先づ打包を解き且過寮に入て憩息し然して後師家と相見す。【象器箋二】

タンゲンキ 探玄記 〔書名〕 具名、華嚴經探玄記、二十卷、唐の法藏撰、晉經六十卷を釋す。

タンゴン 端嚴 〔雜語〕 莊飾の正しく嚴かなると。【法華經序品】に「身色如金山。端嚴甚微妙。」

タレイロカヤ 多齡路迦 〔明王〕 降三世明王の梵語の略稱。タレイロカヤベイシヤヤ 多齡路迦也吠闍也 〔明王〕 又帝釋路迦也吠闍也、帝釋は三、路迦也世、吠闍也降三世明王なり。【大日經疏十】に「帝釋路迦三世也吠闍也此是降勝。」

タロウ 多論 〔書名〕 又、薩婆多論と云ふ。薩婆多タロウ 吒王 〔人名〕 屬賦吒王の略稱。

タン 鶴 〔雜語〕 曹洞宗の準都婆に鶴の字を書して鳥八白と云。「シツタン」を見よ。

タン 單 〔物名〕 姓名を單片紙に書きしもの。又偏紙に物の名を記せしもの。

タンイイチブツジヨウ 但以一佛乘 〔雜語〕 佛の説法の本意は一佛乘の法を教へむが爲めなりとの意。歌題【法華經方便品】に「但以一佛乘。故爲一衆生一説法。」

タンカ 丹霞 〔人名〕 鄂州丹霞山の天然禪師、石頭に嗣ぐ。初め江西に至り、馬祖を見て兩手を以て幘頭頭を拈く。馬祖之を視て曰く、南岳の石頭は汝が師なりと、遂に石頭に抵り亦手を以て幘頭頭を拈く。石頭曰く、禪廠に着き去れ。霞邊に於て行者房に入り、次に隨つて農務を執ると凡そ三年。忽ち一日石頭業に告げて曰く、來日佛殿前の草を刈らんと。期に及んで大衆童行各鉞鎌を構て草を刈る。霞獨り盆水を以て頭を洗て石頭の前に跪く。石頭笑つて之が

タンジキ 揣食 〔術語〕 四食の一。又、團食に作る。揣搏字通、手にて食を握り丸めて食ふを云ふ。是れ印度人の食法に依つて欲界中一切の食物を云ひしなり、印度人は飯と菜とを手にて握りて之を口中に入るなり。新譯には段食と云ふ。分段段にして食する義なり。【註維摩】に「生日。凡欲界食。謂之揣食。揣食者揣搏食也。【同淨影疏二】に「揣食者即揣搏之食也。【康熙字典】に「漢書註揣與搏通。搏以手團之也。禮曲禮毋搏飯。疏取飯作搏易得多。【義林章四食章】に「段者分段。分段受之能持一身命。舊言團者可搏可握立爲團食。此義全非。團字非搏。非三水飲等可搏團圓。云何名團。故應名捏段。」と解するは誤か。拙【法苑珠林】

タンジヤウガ 誕生賀 〔儀式〕 俗に誕生日の賀を爲すあり。按ずるに此法秘軌に出づ。【金剛壽命陀羅尼念誦法】に「若能於三長齋月及自、本生日、作是供養。能除災難。增益壽命。」

タンジヤウゲ 誕生偈 〔雜名〕 釋尊降誕の時、右手に天を指し、左手に地を指し、「天上天下唯我獨尊、今茲而往、生分已盡」と宣し給ひし偈を云ふ。上文は【西域記六】に出づ。【長阿含二】には下句要度

ホウジュエザンマイ 寶珠三昧 「術語」 百八三昧の一。此三昧に入れば一切の境土悉く世實となれば名く。【智度論四十七】に「寶珠三昧者。得三昧。所有國土悉成七寶。」

ホウジュエビクニ 寶珠比丘尼 「人名」 舍衛國に長者あり一女を生む。頂上自然に一寶珠あり。因て字して寶珠と云ふ。來り乞ふ者あれば即ち取て施與す。尋で復た生ず。年長じて佛所に詣て出家し遂に阿羅漢を證す。佛其の往因を説く。【百緣經八】

ホウジュエホフ 寶珠法 「修法」 寶珠は舍利の類なり。寶珠法は即ち舍利法なり。【寶悉地成佛陀羅尼經】に「大寶陀羅尼。名曰法身狀如寶珠甘露藥王金剛精進常經眞如寶王大印。」

ホウジュエボサツ 寶授菩薩 「菩薩」 三才の童子にして大乘の深義を説く。【寶授菩薩提行經】

ホウジュエボサツボダイギヤウキヤウ 寶授菩薩提行經 「經名」 一卷、趙宋の法寶譯。寶授童子年始めて三歲。金蓮を以て佛に供す。遂に目連舍利弗と互に問答して大乘の法義を明かす。又妙吉祥菩薩と問答す。寶授次に一器の飲食を以て徧く佛僧に供して盡くるとなし。【宙映七】(917)

ホウジュエヨウ 寶乘 「譬喻」 又、寶車と云ふ。大白牛車なり。以て法華經所説の一乘の法に譬ふ。經譬喻品に「乘此寶乘。直至三道場。」

ホウセツ 寶刹 「雜名」 佛土の尊稱なり。又佛寺の美稱とす。刹は梵語。刹土と譯す。【莊嚴經下】に「彌覆如來寶刹中。」

ホウセツ 鳳刹 「雜名」 佛寺の美稱なり。鳳は瑞鳥なれば取て美稱とす。

ホウタイダラニキヤウ 寶帶陀羅尼經 「經名」 佛土の尊稱なり。又佛寺の美稱とす。

ホウドウ 寶童子經 「經名」 寶網經の中臺八葉院の尊像なり。赤白色、即ち日の初て出づる色なり。寶幢は菩提心を以て萬行を統率し四魔の軍衆を降伏する標幟なり。密號は福聚金剛。是れ此如來は第八識を轉じて得る所の大圓鏡智所成にして此鏡智は一切の智徳を含藏すれば福壽とも云ふなり。左



(圖の來如幢寶)

手を拳にして脇に安じ、右手垂れて地に觸る。種子は無點の孔字にして、是れ初發の菩提心なればなり。金剛界には阿闍如來と稱す。其の密號同じ。是れ四種法身中の自受用身なり。【大日經一】に「東方號寶幢。一身色如日曜。同疏四」に「次於四方八葉上觀四方佛。東方觀寶幢如來。如一朝日初現。赤白相輝之色。寶幢是發菩提心義也。譬如軍將統御大衆。要得幢旗。然後部分齊一能破敵國。成大功名。如來萬行亦復如是。以一切智願爲幢旗。於菩提樹下降伏四軍衆。故以爲名也。」

ホウドノシンシン 報土眞身 「術語」 化土の化身に對す。眞實報土に住する佛の眞報身をいふ。ホウニヨ 寶女 「雜名」 又玉女と云ふ。轉輪王七

名 一卷、趙宋の施護譯。佛說聖莊嚴陀羅尼經の別譯。童子の帶佩して惡鬼を避くる神咒なれば寶帶と名く。【成映八】(918)

ホウタク 寶鐸 「物名」 又、風鐸、響鐸と云ふ。今華塔の檐端に懸けたる大鈴なり。【法華經】に「金鐸琴箏箏。元亨釋書廿一」に「天智七年。帝創二建福寺于志賀郡。官平三基趾得寶鐸。長五尺五寸。」

ホウタフ 寶塔 「雜名」 珍寶を嚴飾せる塔なり。【法華經寶塔品】に「爾時多寶佛。於寶塔中。分半座。與三釋迦牟尼佛。佛祖統紀四十一」に「無著禪師入五臺。至三金剛窟。見山翁翁說偈曰。一念淨心是菩提。勝造恒沙七寶塔。寶塔畢竟化爲塵。一念淨心成正覺。」

ホウタフボン 寶塔品 「經名」 具に見寶塔品と云ふ。法華經二十八品中第十一品の名。法華の所説を證明せん爲に多寶如來の寶塔忽ち地より涌出す。一會の大衆悉く之を見る。品中此事を叙するを以て名。【タホウタフ】を見よ。

ホウダイ 寶臺 「雜名」 珍寶の臺閣なり。【法華經】に「其土人民皆處寶臺妙樓閣。」

ホウダイ 蜂臺 「雜語」 佛塔の構造方より見れば蜂の巢の如き故に名くるか。【集沙門不應拜俗等事序】に「構蜂臺於勝壤。大周新翻三藏聖教序」に「具牒之遺文。集蜂臺之秘藏。」

ホウダガン 寶陀嚴 「地名」 觀音の住處、寶陀洛迦山 Hōtōka なるなり。又、補陀洛迦、布咀迦迦補陀洛迦に作る。【祖英集】に「寶陀嚴上客。應笑未歸人。冷齋夜話二」に「有。如三世書寶陀嚴。竹今猶在。」

ホウタン 風潭 「人名」 僧潘字は風潭、華嚴道人寶の一。【法華經】に「轉輪王寶女。問。香所在。智度論に「瞿思耶是寶女。故不。孕。子。」

ホウニヨキヤウ 寶女經 「經名」 寶女所問經のホウニヨサンマイキヤウ 寶女三昧經 「經名」 寶女所問經の異名。

ホウニヨシモンキヤウ 寶女所問經 「經名」 四卷、西晉の竺法護譯。大方等大集經寶女品第三の別譯、分ちて十三品となす。寶女あり舍利弗の爲に大乘の深義を説く。佛其の往因を明かす。【玄映五】(920)

ホウニヨライサンマイキヤウ 寶如來三昧經 「經名」 二卷、東晉の祇多蜜譯。佛說無極寶三昧經の別譯。【宙映一】(921)

ホウハラミツ 寶波羅蜜 「術語」 金剛界大日如來の四親近菩薩の第三。白黃色にして左手の蓮華上に寶珠あり、右手四角の金剛輪を持す、密號は平等金剛なり。【胎曼大鈔一】

ホウバウ 寶坊 「雜名」 寺院の美稱なり。欲界色界の中間に大寶坊あり、佛此に於て大集經を説く。【大集經一】に「爾時如來示現無量神通力。漸漸至三彼七寶坊中。又諸大菩薩俱共發誓。來至娑婆世界大寶坊中。【六祖經】に「重建。梵字。延。師居。之。俱成。寶坊。」

ホウバツ 寶筏 「譬喻」 佛の妙法以て生死を渡るホウビヤウ 寶瓶 「物名」 梵に軍持。【法華經】に「佛具法具の瓶器を尊稱して云ふ。華瓶水瓶等數種あり。【觀無量壽經】に「有。一。寶瓶。盛。諸。光明。」

密法に灌頂の香水を容るる器を寶瓶と云ふ。ホウビヤウ 寶標 「物名」 法螺の貝なり。ホウビヤウイン 寶瓶印 「印相」 寶瓶を形どる

と號す、越中西彌波の人、華嚴を宗とし、山城松尾華嚴寺を創す。然るに師深く天合性惡の說に服し其の解する所動もすれば一宗の軌範に遠越す、因て師を本宗の異稱とす、一代の著書頗る多し。往往諸宗諸家を攻撃し彌氣汪勃たり。元文三年寂、壽八十有五。ホウチ 寶池 「雜名」 淨土の八功德地なり。【觀無量壽經】に「極樂世界寶樹寶池。寶池。」

ホウチクワン 寶池觀 「術語」 觀經所説十六觀中の第五。極樂淨土の八功德池の相を觀見するなり。【經】に「次當。想。水。想。水。者。極樂國土有。八。池。水。是。爲。二。八。功。德。水。想。名。第。五。觀。」

ホウチバウ 寶池房 「人名」 叡山の學僧澄眞の房號なり、三大部私記を著して名あり。

ホウツウ 報通 「術語」 五種神通の一。鬼神龍王等が自己生得の果報として有する神變。

ホウテン 寶典 「雜名」 經典の美稱なり。【教行信證六末】に「無上甚深之寶典。」

ホウテンピク 寶天比丘 「人名」 舍衛國の長者に一子あり生る時天七寶を雨らす。依て勒那提婆 Dharaṇaka と名く、此に寶天と譯す。長じて佛所に詣り、出家して比丘となり阿羅漢果を得、佛其の往因を説く。【賢愚經二】に「得るものを云ふ。修得に對す。

ホウトク 報得 「術語」 其人の果報として自然にホウトクザウキヤウ 寶德藏經 「經名」 佛母寶德藏般若波羅蜜經の略名。

ホウド 報土 「術語」 四土の一。萬行の因に酬て得たる萬德莊嚴の淨土なり。【シド】を見よ。

ホウドウ 寶幢 「物名」 寶珠を以て莊嚴せる幢竿なり。【大日經疏五】に「上置。如意珠。故曰。寶幢。」

印契なり。初に合掌を成し左右の頭指を屈して中指の根下に至らしめ、左右の拇指並に之を壓して瓶の如くならしむ。【圖印集二】に「寶瓶印。作。三。補。陀。屈。二。風。指。令。指。頭。至。三。火。指。根。下。二。空。指。並。壓。之。」

道事鈔上に「塔印寶瓶印大慧刀印。此三印同別名也。隨其所用。改。阿闍梨觀心。也。」

ホウブ 寶部 「術語」 密教五部の一。佛の自利圓滿して無邊の福徳を具する方面を云ふ。

ホウボツツ 報佛 「術語」 「ホウシンブツ」に同じ。ホウボツツ印 寶菩薩印 「印相」 金剛寶菩薩の寶印なり。金剛縛を成じ、左右の頭指を以て寶形

の如くし、左右の拇指を普立す。【圖印集一】に「寶菩薩寶。金剛縛。進力如。寶形。禮智並立。」

ホウマウ 寶網 「物名」 珍寶の羅網なり。帝釋宮の羅網を帝網とも因陀羅網とも云ふ。【無量壽經上】に「珍妙寶網。羅覆其上。」

ホウマウキヤウ 寶網經 「經名」 一卷、西晉の竺法護譯。寶網童子の請問に依て六方佛の功徳を説く。【黃映四】(924)

ホウミヤウ 報命 「術語」 過去の業因に報ひて受けたる一期の壽命なり、依て報命は増減すべからず、即ち定命なり。